

Title	中国語母語話者による日本語の漢語形容動詞の習得
Author(s)	黄, 瑩
Citation	大阪大学, 2017, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/67064
rights	
Note	やむを得ない事由があると学位審査研究科が承認したため、全文に代えてその内容の要約を公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 〈a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed"〉 大阪大学の博士論文について 〈/a〉 をご参照ください。

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

論文内容の要旨

氏名 (黄 瑩)

論文題名

中国語母語話者による日本語の漢語形容動詞の習得

論文内容の要旨

現代の日本語と中国語において同じ漢字で表記される単語は「同形語」と呼ばれている。漢字構成の形容動詞には、同形語が数多くある。しかも、それらの機能は同じく物事の性質や状態を表すものが多い。一般に、豊富な漢語使用は格調の高さを感じさせる効果があり、かつ中国語使用の場面において頻繁に同形の形容詞が使用されるため、日本語教育の現場では中国人学習者が漢語構成の形容動詞を多用する傾向が見られる。そのうち、「同一人物」「非常ナ場合」のような日本語母語話者に違和感を与える例も存在する。

形容動詞を含む日中同形語の意味領域の研究はこれまで盛んに行われてきたが、形容動詞が名詞を修飾する際にどのような成分が用いられているかに関する検討はまだ少ない状況にとどまっている。

本論文は現在の中国でも同じ表記を用いた「同形語」が存在し、それらの「同形語」としての中国語も同じく物事の性質を表す機能がある漢語語幹をもつ形容動詞を「漢語形容動詞」と呼び、『日本語能力試験出題基準』(凡人社, 2007)に収録された日本語能力試験出題基準語彙表(2級)から86語を抽出して研究対象とする。その上で、漢語形容動詞が名詞を修飾する際に現れる「ナ」と「ノ」の選択問題について種々の調査・分析を行う。本論文の研究目的は以下の3点である。

- (1) 品詞論における形容動詞の位置づけ、国語辞典における「ナ」と「ノ」の記載、教科書における形容動詞(ナ形容詞)の扱い方を調査し、中国人日本語学習者(以下、学習者)の「ナ」と「ノ」の選択基準の限界について検討する。(第3、4、5章)
- (2) コーパス検証により「ナ」と「ノ」の使用実態を把握したうえで、寺村(1982:66-72)における判定テスト(以下:寺村テスト)を援用し、「ナ」のみと結合する語、「ノ」のみと結合する語、および「ナ」と「ノ」の両方と結合する語のグループ分けを試み、それぞれのグループに属する語の文法的特徴を検討する。また、漢語形容動詞の意味カテゴリーが「ナ」と「ノ」の選択に与える影響についても分析により明らかにする。(第6、7章)
- (3) アンケート調査により学習者の「ナ」と「ノ」の使用状況を確認し、誤用のパターンを分析し、誤用の原因を究明する。(第8、9章)

本文は10章で構成されている。各章の概要は次のとおりである。

第1章では研究目的、研究対象としての「漢語形容動詞」の定義づけと選定、および本論文の構成について概観した。

第2章では「ナ」と「ノ」の選択に関する先行研究について概観した。桜井(1964)は母語話者に見られた「ナ」と「ノ」の使用上の「ゆれ」について検討を行った。「ノ」と結合する語例と両方と結合する語例を挙げたが、分類には至っていない。スワン(1994)は「ナ」と「ノ」の使用を厳密に区別するのは困難であることを提示したが、有効な区別基準の検討を行っていない。羅(2004、2005)は「ノ形容詞」という概念を援用し、母語話者と学習者における「ナ」と「ノ」の使用傾向を調査したが、「ノ形容詞」という名称は教育現場で使用されておらず、学習者は「ノ形容詞」のグループに属する語の判断に困難がある。田野村(2002)は「有/無」がついて対となる語の「ナ」と「ノ」の選択問題について検討したが、研究対象は顕著な特徴があるものであるため、結論は形容動詞全体に適用できないと考えられる。

第3章では「ナ」と「ノ」の使用に関連する品詞設定の問題点について整理した。「ナ」と「ノ」の選択問題が存在する根本的な原因の1つは形容動詞の品詞分類にある。寺村(1982)は「形容動詞」というカテゴリーの設立を認めず、「名詞的形容詞」という概念を提出し、「名詞」と「名詞的形容詞」を判定するテストを設置した。漢語形容動詞は「名詞的形容詞」の範疇に属し、寺村テストは漢語形容動詞が備える文法的特徴および「ナ」と「ノ」の選択傾向の

判明に有効であるため、本論文は寺村テストを用いて分析を行った。寺村(1982)と同様に影山(1993)は「形容動詞」というカテゴリーの設立を否認して「形容名詞」という名称を用いた。さらに、村木(2002)は「第三形容詞(ノ形容詞)」という名称を用いた。「形容動詞」という品詞は「形容動詞」のカテゴリーに属する語の文法的特徴を適切に表していないことが明らかになった。

第4章では先行研究において漢語形容動詞の後ろにつく「ナ」と「ノ」の機能に関する完全な定義がないことを明示した。「ナ」と「ノ」の機能に関する正確な認識を持たないことは学習者の誤用につながると推測される。寺村(1991)は「ナ」と「ノ」を判定詞「ダ」の活用形とし、両方とも修飾機能を果たすと主張した。本論文は漢語形容動詞が名詞修飾機能を果たす際に現れる「ナ」と「ノ」の選択問題を検討するため、「ナ」と「ノ」の間に共通の性質があると考え、寺村(1991)の立場をとった。

第5章では学習者が主に活用する国語辞典の記述と教科書の記載内容について分析した。学習者が「ナ」と「ノ」の選択に迷った場合、主として参考にするのが国語辞典である。『大辞林 第三版』(三省堂,2006)、『新明解国語辞典 第七版』(三省堂,2011)、および『岩波国語大辞典 第七版』(岩波書店,2007)の3冊において、選定した86語の漢語形容動詞の記載を調査した結果、辞典によって見出しの表記が異なり、品詞などの指示も一致していないことが明らかになった。一方、教科書にある「形容動詞(ナ形容詞)」の記載内容が学習者の習得効果につながるため、中国で出版され、中国の日本語教育現場で多用されている教科書に提示された形容動詞(ナ形容詞)の説明についても検討を行った。その結果、教科書からは形容動詞(ナ形容詞)の特徴に関する記述は十分得られず、名詞を修飾する際に「ナ」のほかに「ノ」も使用できる場合があることに言及されていないことが明らかになった。

第6章では本論文が用いる「ナ」と「ノ」の選択傾向を分析する研究方法についてまとめた。まず、『現代日本語書き言葉均衡コーパス 少納言』を利用して86語の漢語形容動詞の「ナ」と「ノ」の使用頻度を調査した。その上で、寺村テストを用いてそれぞれの漢語形容動詞が備える文法的特徴を分析した。統語論の観点から設定したテストは漢語形容動詞の性質および「ナ」と「ノ」の選択傾向を明らかにするためには有効であるが、そのみでは解決できない疑問点が残るため、さらに漢語形容動詞が属する意味カテゴリーによる分析を行った。

第7章では本論文の研究方法を用いて、漢語形容動詞が「ナ」か「ノ」と結合する用例の検索を行った。まず、「ナ」と「ノ」の選択率により、86語の漢語形容動詞を「『ナ』とのみ結合する漢語形容動詞」、「『ナ』と『ノ』の両方と結合可能な漢語形容動詞」、「『ノ』とのみ結合する漢語形容動詞」の3つのグループに大別した。さらに、寺村テストを用いて、それぞれの語が備える文法的特徴を分析し、意味的観点からの検討も行った。その結果、86語の漢語形容動詞が5つのグループに分けられることが明らかになった。具体的には、①グループⅠの語は典型的な名詞的形容詞であるため、「ナ」とのみ結合する、②グループⅡの語は名詞的形容詞の機能以外、名詞としての機能も備えるため、「ナ」と「ノ」の両方と結合しうる、③グループⅢの語は意味の二重性があるため、「ナ」と「ノ」の両方と結合しうる、④グループⅣの語は名詞ではないが、顕著な名詞性があるため、「ナ」と「ノ」の両方と結合しうる、⑤グループⅤの語は「ノ」とのみ結合し、名詞的形容詞性も名詞性も顕著ではないことが分かった。先行研究は「ナ」と結合する場合、「ノ」と結合する場合、「ナ」と「ノ」の両方と結合しうる場合があることに言及したが、それらの分類には至っていない。また、本論文は5つのグループにある連続性を提示し、それぞれのグループに属する語が名詞修飾機能を果たす際に「ナ」と「ノ」の選択傾向を明らかにした。

第8章では「ナ」と「ノ」の使用傾向と対照し、学習者の「正用」と「誤用」を確認した。学習者の使用状況を把握するために、修士論文の予備調査を踏まえて二次調査を実施した。調査結果に対して集計・考察を行い、以下のような結論が得られた。①「ナ」とのみ結合するグループⅠの語に関する平均正答率は三年生の協力者と四年生の協力者はそれぞれ66.25%と74.75%であり、グループⅠに属する語のすべてに対して明確な認識があるとはいえない。②グループⅡに属する語の正答率は三年生の協力者と四年生の協力者はそれぞれ63.52%と69.85%である。それらの語が文において果たす機能を正確に判断できるか否かは「ナ」と「ノ」の選択に関係するため、今後学習者の使用意識を調査することが必要であると考えられる。③意味の二重性があるため、「ナ」と「ノ」の両方と結合しうるグループⅢの語に関して、「ナ」と「ノ」の両方を使用する傾向が見られたが、個別調査により、学習者が「ナ」と「ノ」と結合しうる原因について認識できたとは判定できないことが分かった。④グループⅣの語に関して、「ナ」と「ノ」の両方も使用されており、それぞれの選択率に顕著な差が見られなかったことから、それらの語の意味的特徴に関して学習者はある程度認識できていると考えられる。⑤「ノ」とのみ結合する語の正答率が全体的に低かったことから、学習者はそれらの語が存在することを認識できていないと推測できる。学習者に対して、漢語形容動詞が5つのグループに分類できることとそれぞれのグループに属する語が備える特徴を、例を示して提示することが必要であると考えられる。

第9章では誤用のパターンを分析し、誤用の原因の推定を行った。二次調査を実施した結果、「ナ」と「ノ」の誤用

以外、不適切な複合語の産出と日本語の接尾辞「的」の誤用が見られたことから、誤用の原因の推定を行った。「ナ」と「ノ」の習得、接尾辞「的」の習得が不完全であることは学習者の誤用の産出につながると推測される。また、中国語の母語干渉も誤用の原因の1つであると考えられる。

第10章では本論文での分析結果と今後の課題についてまとめた。本論文は中国人日本語学習者向けの語彙習得の指導のための基礎的な研究として、漢語形容動詞が連体修飾語として機能する際に現れる「ナ」と「ノ」の問題について検討を行った。「ナ」とのみ結合する漢語形容動詞、「ナ」と「ノ」の両方と結合しうる漢語形容動詞、および「ノ」とのみ結合する漢語形容動詞の分類を行い、それぞれのグループに属する語の文法的特徴と意味的特徴を検討した。さらに、各グループの間にある連続性を判明した。「ナ」と「ノ」の使用傾向と対照し、学習者の「正用」と「誤用」を確認し、誤用の原因の推定を行った。今後の課題は、①漢語形容動詞の教科書における提示方法の検討、②中国人学習者の「ナ」と「ノ」の使用意識に関する調査、③「ノ」の機能に関する検討、④漢語形容動詞と形容詞の区別に関する検討、の4点である。

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏 名 (黄 瑩)			
	(職)	氏 名	
論文審査担当者	主 査	教授	渡邊 伸治
	副 査	名誉教授	沖田 知子
	副 査	教授	村岡 貴子
	副 査	准教授	瀧田 恵巳

論文審査の結果の要旨

中国人日本語学習者にとって、形容動詞が名詞に前接する場合に、「ナ」を選択するのかあるいは「ノ」を選択するのかという問題は習得が困難な問題の一つである。本論文は、形容動詞のなかでも中国語に同形の語彙がある漢語形容動詞 86 語を取り上げ、「ナ/ノ」の選択パターンの分類と、その使い分けに関する中国人日本語学習者の誤用パターンを考察したものである。

論述は、「ナ」と「ノ」の使い分けに関する先行研究、品詞論の中での形容動詞の位置付けに関する先行研究をまとめたうえで、さらなる精密化の必要性を指摘することから始まる。さらに、日本語教育の観点から、国語辞書、日本語教科書をていねいに考察し、その記述は辞書、教科書によりばらつきがあり、明快な記述が与えられていないことを指摘する。

続いて、「現代日本語書き言葉均衡コーパス (BCCWJ)」の「小納言」を用いて当該の漢語形容動詞 86 語の「ナ/ノ」の一般的な選択傾向を確認したうえで、寺村 (1982) が設定しているテストを精密化したものを用いて、「ナ/ノ」の選択に関するグループ分けをおこなっている。結論として、考察対象になっている漢語形容動詞 86 語は、次の五つのグループに分類されている。「偉大」「単純」などが含まれるグループⅠは「ナ」のみを選択する典型的な形容動詞である。グループⅡからⅣは「ナ」と「ノ」をともに選択するが、「自然」「自由」などが含まれるグループⅡは、「ノ」を選択した場合には当該の語彙は名詞であるグループである。「高級」「純粹」などが含まれるグループⅢは「ナ」を選択した場合も「ノ」を選択した場合もともに形容動詞ではあるが、意味的な相違がみられるグループである。「垂直」「水平」などが含まれるグループⅣは名詞性が強い形容動詞であるが、「ナ」を選択した場合と「ノ」を選択した場合では意味的な相違はみられないグループである。「共通」「絶対」などのグループⅤは「ノ」のみを選択するグループである。

以上のように、本論文は、「ナ/ノ」の使い分けに関し先行研究よりもより精密なグループ分けをしている点で、また、分類したグループを名詞性の強さという観点からスカラー上に載せている点で高く評価できるものである。

本論文は、続いて、中国人日本語学習者におけるグループごとの正答率をアンケートにもとづき調査している。例えば、「ナ」のみを選択するグループⅠは教授が比較的容易であるが、その正答率の統計結果から、グループⅠの語彙であっても正答率の低い語彙（「意外」「可能」等）があることがわかる。また、「ノ」のみを選択するグループⅤの語彙の正答率が概して低いことも示されている。さらに中国人学習者の誤用の要因として、複合語や「的 de」の用法の問題にも踏み込んでいる。これらの情報は、日本語教育の観点からも重要な情報になるであろう。

なお、試問においては、グループ分けに用いられたテストがやや不十分であり、グループⅡからⅣの分類はさらに精密化する必要があるという指摘や、もう少し論文題目にある「習得」に関する議論を深化させれば日本語教育にさらに貢献するものになるであろうという意見なども出されたが、これらは今後の研究の発展に繋がるものであり、全体としての本論文の価値を大きく損なうものではない。

以上、本論文は、言語学的にも言語教育的にも重要な貢献をおこなっているものであり、博士（言語文化学）の学位論文として価値のあるものと認める。

なお、チェックツール“iThenticate”を使用し、剽窃、引用漏れ、二重投稿等のチェックを終えていることを申し添えます。